平秩東作という男

横松和平太

大田南畝という狂歌や戯作で知られた江戸時代の文人がいる。少し興味があったので、或る日新宿歴史博物館の企画展「『蜀山人』大田南畝と江戸のまち」を覗いたことがあった。

会場で図録を記念に求めたのだが、その中に彼の周辺にいた仲間の紹介があった。著名な狂歌師の朱楽菅江とか唐衣橘洲に並んで平秩東作(へづつとうさく)という男がいた。

その紹介文には、本名立松懐之、通称稲毛屋金右衛門。戯作者。内藤新宿生まれ、生家の商売は馬宿。のち煙草屋を開業し、その傍ら狂歌・戯作を好み、その流行の端緒を開いたひとりとして知られる。と、凡その説明があった。

私も本名立松であるが、この姓は尾張・名古屋でも決して多くはなく、たまに耳にする程度でしかない。今住んでいる浦安はもとより、関東地方では珍しい姓だと思う。作家に立松和平がいたが、栃木出身で本名は横松である。

思えば亡き父と、立松という姓について語り合ったりルーツを話題にした

こともなかった。でも、気にはなっていた。平秩東作こと立松懐之は、我がルーツと関わりが有るのか無いのか？

どんな人で、どんな生き方をしたのか？ この男のことが気になり始め、もっと知ってみようと思い立ったのである。彼を知れる資料はとても少なく、真偽の程を含めとても心もとないのではあるが、以下ほとんど世に知られることのない、この男の人生を辿ってみたい。

父祖は尾張の出

立松懐之は父・太郎左衛門道佐、母・さんの長男として 享保十一年(一七二六)に内藤新宿で生まれている。父四十歳、母二十六歳の時だった。父親の出身は尾張の国弥富の農家の長男であったのだが、家を異母弟に譲り十六歳の時江戸に出る。立松家の祖は津島の社家(神職・社僧)であったが、弥富に平島新田を開発し、富を増やした家だったという。

立松という姓は津島や海部郡の中南部、名古屋市の西部に多いらしい。私の家は名古屋の東部だったので周りで耳にすることもなく、同姓の人が高校に進学した時、他に二人もいて驚いたくらいであった。私の父は名古屋市北区の出であったが、そう言えば先祖は津島からだと、人伝てに聞いたことがあった。どこかで東作の家系と繋がっているのかも？

東作の父が江戸に出る時頼ったのは、尾張の地縁・血縁であった。尾張藩の祖・徳川義直の曽孫にあたる美濃高須藩主松平義孝は四谷に屋敷があったが、そこに働く故郷出の足軽たちを伝手にしたらしい。松平義孝の母が角筈村(今の新宿三丁目付近)に隠棲する時、隠居付き小役人となり永らく真面目に勤め上げた。妻はご隠居の腰元だったから謂わば職場結婚、でも晩婚だった。

小金を貯め、退職後に内藤新宿の馬宿屋の株を金二十五匁で買い求める。馬宿は屋号稲毛屋、通称金右衛門と言ったがそのまま称することにした。要は居抜きで商売を始めた。

内藤新宿は甲州街道の最初の宿場として、五人の浅草商人が幕府に開設を願い出て元禄十年(一六九七)開設。幕府へは金五千六百両上納したという。旅籠屋は多くの遊女を抱え繁盛したが、吉原を脅かすほどに乱れ、将軍吉宗の時代享保三年(一七一八)に一度廃宿になっている。宿場だから運送業として中馬・馬宿もあったが、その中に武州・稲毛村(現稲城市)出身の金右衛門が営む店が甲州街道沿いにあった。古地図によれば今の都営地下鉄新宿三丁目駅附近にあたる。

推察するに、東作の父親がその馬宿業の権利を屋号毎買い取ったのは、享保八年(一七二三)頃らしい。とすれば内藤新宿が廃宿になっていた時代だ。稲毛屋は先に見切りをつけて権利を売却したのかも。

東作が生まれたのは、享保十一年(一七二六)創業間もない頃であった。妹も三人うまれたようだが、東作が十歳の享保二十年(一七三五)、父親が四十九歳で病死する。残された母親は勢州・菰野というから今の三重県出身の男をむかえるが、この男はケチで働きも悪かったらしく追い出してしまい、幼い子供を抱え自ら馬宿を営む。しかし馬宿を止めて煙草屋に転業することになる。元文四年(一七三九)、東作十四歳の時であった。苦労が多く波乱の幼少期だったといえよう。

煙草屋・稲毛屋金右衛門

馬宿から煙草屋に転業した頃、東作は子供から大人となり稲毛屋金右衛門と名乗るようになったのであろう。母親が決断した煙草屋への転業であったが、どうしてこの商売を選んだのであろうか？　ここで当時の煙草事情を少し考えてみたい。

そもそもタバコの文化と歴史をひもとけば、次のようである。植物としてのたばこは、南米アンデス山中が原産とされ、南米から中南米にかけて広く

吸われ、嗅がれ、噛まれ嗜まれていた。また神々との交信の道具としての聖なる植物として儀式で使われていた。アメリカ大陸のタバコ文化がヨーロッパに伝えられたのは十五世紀半ばの大航海時代のことであった。ポルトガル、スペインがヨーロッパ各地へ、アジアへと伝えていった。

我が国への渡来については諸説あるが、鉄砲やキリスト教などと同じく南蛮(ポルトガル、スペイン)渡来の品々の一つだ。十六世紀後半から南蛮船がこれを伝え、十七世紀初頭の江戸幕府が始まる頃には栽培も行われるようになったようだ。煙草の喫煙文化は急速に人気がでたようだが、慶長十年(一六〇五)には禁令が出たとの記録もある。これは女性や子供にも喫煙がみられ、風紀の乱れや失火を理由とされたようだ。また煙草の耕作についても、米や麦の耕作の妨げになるため、度々禁じられた。

しかし、度重なる禁令下にあっても煙草は流行していったため、次第に喫煙は許されていく。十七世紀半ばになると、百姓の喫煙を戒めたり、江戸城下馬所における喫煙の禁令が出たりしていることでも分かる。

面白い禁令としては、江戸で〝歩きたばこ〟の禁令が出たことか。元禄八年(一六九五)十月のことである。将軍綱吉の時代だ。彼は将軍の休息所附近における喫煙禁止令も出している。タバコ嫌いだったのだ。煙草耕作の禁止は、たばこの流行につれ耕作地の制限から耕作地削減令へと変化していった。

逆に将軍吉宗の時代には商品作物の一つとして栽培が更に広まったようだ。

稲毛屋が煙草屋に転業したのはこの時代であり、煙草の生産地も広がり、刻み煙草をキセルでくゆらす喫煙文化の人気が高まってきた時代だ。東作の母親はここに着目して先行きの成長が見込める商売として商売替えを決断したのであろう。甲州街道を行き交う人たちに馬宿を改装した店先で旅のお供に煙草を勧め、商ったのか。煙草の葉は薩摩の国分産が最高のブランド品であったようだが、関東各地の産地から問屋や仲買いから仕入れ、乾燥させ店先で刻んで売った。当時の煙草屋には夫婦で商う小店から刻みの職人を多く抱える大規模店まであり、更には行商して売りあるかれたようだ。稲毛屋の店構えはどうだったのか？　元は馬宿だから間口は広い店だと思えるが。煙草といえばキセルとか煙草入れなどの関連グッズがあるのでこれを並べ扱うことも考えられるが、どうもそれは無かったようだ。これは小間物や袋物屋、キセル屋が商った。ワンストップマーケティングという発想はまだない。後に東作がバリバリ働くようになって、彼がひとかどの著名人になってから、ひょっとしたらこれをやったかも知れないと、妄想してみたい。戯作者・狂歌師の後輩にあたる山東京伝は、御煙草入品々を商う「京屋」という店を出しているし、自ら引札つまり宣伝チラシを制作したりしているように。

文藝仲間

母親が仕切っていた煙草屋の後継ぎとなった東作は、母親を助けて家業に励んだ。母子家庭で必ずしも裕福ではなかったと思われるが、煙草屋は儲かっていたかもしれない。母親は東作を学問修業に出してくれたのだ。

亡き父が病床から東作の手をとって「汝幼稚ナガラ衆ニ秀ヅベキ相アリ。ツトメテ書ヲヨムベシ。我書ヲヨムイトマナクシテ素思ヲ遂ゲズト遺訓シテ果テヌ」という経緯があったからかもしれない。また、十歳の頃より既に狂歌を口ずさんだという逸話もある。幼い頃よりの学問好きの子供の為に塾にやらせてくれた母親をきっと敬愛していたことであろう。。

煙草屋を継ぐ前から、僧侶について儒書を読み習い始め、和歌は坂静山、漢学は岡井嫌州の門人という。坂静山の弟子筋に牛込に住む幕臣の内山賀邸という師匠がいて東作も出入りしていた。賀邸先生は近隣の若者たちに和歌を教えていたが武家の子弟が多く、後に狂歌ブームを生むサークルの主だった。自分でも狂歌を作ったこの先生は、出世には役立たない和歌や漢文学より狂歌を弟子たちに勧めたようで、この一門から大田南畝、朱楽菅江、唐衣橘洲などの武士が出た。御徒の大田南畝は東作よりも二十三歳も年若だがその才能を認め、やがて生涯の友となる。出会いは東作三十八歳、南畝十五歳

の時であった。

東作の学問仲間で親友に、同じ内藤新宿生まれの川名林助という男がいた。彼は放浪癖もあったというが、東作の家に居候したこともあった。彼を南畝に紹介したが、その知り合いの平賀源内とも繋がりができていく。友達の輪繋がりだ。

平賀源内は讃岐の志度浦から、もて余る才能と野心を携えて江戸に出てきた下級武士だった。元々本草学の研究者だが戯作にも才能があった。宝暦十三年(一七六三)に『根南志具佐』『風流志道軒伝』という大ヒット作で世に知られるようになる。翌年に東作は『水濃行方』という戯作を書くが、その序文は源内、跋文を林助が書いている。南畝は明和四年(一七六四)に『寝惚先生文集』で戯作デビューするが、その序文も風来山人こと源内であった。東作が恐らくその仲立ちとなったと思われる。しかし二歳の年下にはなるが源内は東作の人生に大きな影響を与えることになる。

学問仲間には東作のような町人と南畝のような武士との交流がみられるのだが、その中には篠木淳房(勘定組頭)石谷清昌(勘定奉行)のように後に高級官僚となる武家もいたりするが、それも含め後の段落で別途触れてみたい。身分制度に厳しい封建社会とはいえ、田沼時代の予兆のような社会変動の一

断面が見られるのだ。

天明の狂歌師

近世の狂歌には二つの流れがあるという。一つは京都を中心とする貴族にはじまり、次第に上方庶民に広まっていった浪花狂歌の流行。もう一つが江戸狂歌といわれるものである。江戸時代に入ってから江戸の武士の間に起こり、町民がこれに加わり全国的に流行したものである。天明年間に大ブームとなったが、近代になってからは急速に衰え、今日では影もない。俳諧は俳句となり、川柳は今なお人気があるのとは大きく異なる。

何故そうかは、比較的分かり易い。先づは俳句が十七字に対し和歌は三十一字と長い。狂歌は古典和歌のパロディがその本質だと思うが、本となる和歌や漢籍の素養が無いとパロディとなりづらいのである。和歌そのものに百人一首程度の知識しか持ち合わせていない我々にはとても無理なのである。狂歌は大正の頃に廃絶したという。

そんな簡単でもないのに狂歌は、特に江戸では教養ある武士の間で流行し、その外面的な風流や諧謔・技巧を模倣・追随したのが富裕な町人・大衆たちであった。

八代将軍吉宗の没後、幕府は再び停滞期に入り倹約令やインフレで慢性的

な不況の時代となりサラリーマンたる武士は時代閉塞下にあった。この抑圧へのはけ口として、若い武士たちの間に、一種の文芸遊戯として狂歌や狂詩が発生し、町民層を巻き込んで大流行したのであるが、その渦中にわが平秩東作もいたのである。

先にみた和歌の内山賀邸先生の年長の弟子として町人・稲毛屋金右衛門こと東作がいた。賀邸先生は牛込在の幕臣で、弟子筋に才能ある若き武士達がその近在に居た。牛込には四方赤良(大田南畝)、朱楽漢江、四ッ谷の唐衣橘洲(田安家家臣)達である。明和六年(一七六九)のころ唐衣橘洲のもとではじめて狂歌の会が開かれ、狂歌好き達が集まった。東作も顔を出し、文学好きの町人として辻番請負の大根太木(飯田町)、京橋の湯屋を営む元木網、知恵内子夫妻も参加して少数ながら江戸狂歌が始まり、翌明和七年(一七七〇)に始めて狂歌合せが行われることになる(「明和十五番狂歌合せ」)。この時、東作すでに四十五歳、まだ二十代だった南畝達からみたら親父のような年恰好の先輩だったが、紛れもなく狂歌ブームの先駆けの一人、江戸戯作の草分けであった。彼らは引き続き狂歌会を催しただけでなく、洒落本の戯作をしたりした。浜辺黒人は狂歌書を出版し、点料をとったりもしたという。東作は滑稽本『狂歌師細見』(天明三年刊)の編者となっている。蔦屋重三郎(蔦唐

丸)が版元だから『吉原細見』に続くガイドブックシリーズものか。

大流行した天明期には狂歌のグループがいくつもできた。武士が中心の連には、赤良がリーダーの山手連、漢江は朱楽連、橘洲は四ッ谷連、等があり、町人達は落栗連、芝連、伯楽連、スキヤ連等に集まった。これらに集まった人の中には洒落本作者の朋誠堂喜三二、恋川春町。山東京伝、画家に酒井抱一、喜多川歌麿、出版の蔦屋重三郎、江戸落語の創始者でもある立川焉馬、歌舞伎役者の市川団十郎、妓楼の亭主達も加わり、江戸文化の武士と町人達の交歓の場、共通の嗜みとなった感があった。

狂歌師は皆狂号を名乗っている。宿屋飯盛、山手白人、地口有武、大屋裏住、手柄岡持、酒上不埒、筆綾丸などなどだ。洒落や遊び感覚に溢れたものが多いし、人と業を伺わせ、ウイットに富み面白いものがある。

だが一方平秩東作という狂号は堅苦しいイメージがするし、すんなりとは読めない。漢籍の中にある「東作ヲ平秩(ベンチツ)セヨ…」から引いたというが。平秩は順序立てる、東作は春の作業、農事をいうとある。平秩の読みは正しくはベンチツ、俗音にしてもヘイチツらしいのだが、彼は〃へづつ〃と名乗り書いている。親友の平賀源内が『放屁論』なる書を書いているが、平秩の読みに関係があるのか？ 屁っぴり儒者だと己れを戯れに自虐したものか。先祖が尾張の百姓で屋号が稲毛屋だから稲作に因んだのかも知れない。

狂歌は和歌の古典から本歌取りをする。取るは盗るでも盗作だから東作としたのか。

鳴ハ見えねど 西行の歌ゆへに 目にたつ沢の秋の夕くれ

事業家・稲毛屋金右衛門

平秩東作こと稲毛屋金右衛門は狂歌師・戯作者として活躍したが、実生活では波乱続きであった。明和元年(一七六四)には火災で家を焼かれ書物も類焼し再建に多額の損失を出したようだ。そんなことから熱心な浄土真宗の門徒となり、邪宗御蔵門徒事件(明和四年)を幕府に訴人し褒美銀三枚を頂戴したとある。このことを「邪宗ヲ砕キシ事、仏法王法ニ対シ、懐之ガ生涯ノ勤労コレニアリ……」と亡くなる間際に遺言し誇りにしていた。

同年は、あの田沼意次が側用人に起用された年で、五年後の安永元年(一七

七二)に彼は老中にまで出世し、いわゆる田沼時代へと時代が動き始めた時であった。東作はこの年、内藤新宿の町内上納方となっている。享保三年(一七一八)以来五十一年間廃宿となっていたが、幕府への運動の甲斐あって再び甲州街道の公認宿場となったのである。東作の学問仲間、狂歌師繋がりの幕府勘定方役人・篠木淳房、石谷清昌などの人脈が生きたのかも知れない。

稲毛屋金右衛門は単なる煙草屋で良しとせず、安永二年(一七七三)、四十八歳にして新事業に乗り出す。幕府直轄領・伊豆天城の山中での官専用の炭焼である。事業を始めるに当たっては、幕府に申請し資金を借りている。ここでも幕府(後に勘定奉行)石谷清昌のコネと口添えがあったようだ。田沼人脈につながる石谷清昌とは古くから縁があり、彼の息子の学問を見たこともあり、家来同様に出入りしていたという。

炭焼きの技術は紀州・熊野出身の名人山本文之右衛門を招いたという。しかし事業は失敗し巨額の焦付きを出す。何故に伊豆で炭焼事業かといえば、二才年下の親友平賀源内の存在が大きいように思える。源内は本草の鉱石探しで天城山中に出向いたことがあり、伊豆・天城に目をつけていたのだ。源内のコネも活かし彼に先んじ炭焼きを始めた。

畸人・平賀源内は江戸に出てきて以来、その活動エネルギーには凄まじい

ものがあった。戯作者としても浄瑠璃『神霊矢口渡』の台本作者でもあり、本草家であり、博物学者でもある。長崎に遊学経験もあるところから、西洋技術を取り入れ寒暖計やエレキテルを自作し、陶芸家として源内焼を指導したりした。

洋画の先駆者でもあり司馬江漢や秋田蘭画の小田野直武も弟子筋だ。さらに本草学の延長上に鉱山開発の技術者として乗り出している。秩父で金山の開発に失敗しても懲りずに、鉄鉱山の開発を本格的に手がけた。精錬に必要な木炭の製造、さらには荒川への通船による江戸への積出しまで構想している。秋田藩から招かれ、院内銀山、阿仁銅山の鉱山開発指導をしたりしている。このあたりから彼は山師と呼ばれたりした。

源内と戯作を通じての親交があった東作は、源内から大いに刺激を受け学ぶところがあったのではなかろうか？　鉱山での精錬には燃料に炭が欠かせなかった。源内が秩父で炭焼きを構想し始めた安永四年(一七七五)、東作は煙草屋の家業は十四歳となった長男八右衛門に譲り、自身は本所相生町で材木問屋を始める。源内・秩父繋がりのようだがこれもうまくいかなかったとみえ、一時上総に隠れたという。翌々年に鉄砲洲船松町で、今度は炭屋を開業している。

平賀源内は源内櫛とか金唐革紙製の煙草入れや財布等の新商品の開発で名

を挙げ稼ぎ借財の穴埋めを目論んだ。。しかし余り儲けにはならなかったようである。。本人的にはあらゆることに決して満足がいかず、いつもその才能が世に充分受け入れられていないという思いが強かった男である。鬱屈した思いの中で、ふとしたことから殺人を犯して捉えられ獄中で病死する。彼の遺体を東作が公儀に目をつけられる危険を犯し、引き取ったという説もあるくらい深い付き合いがあったのであろう。

源内はもとより事業家としては半端者だが、東作には端なる煙草屋で終わりたくないという野心もあったようだ。先駆者として河村瑞賢や田中丘隅が念頭にあったという。

河村瑞賢は一七世紀に活躍した伊勢出身の事業家だ。十三歳で江戸に出て苦労し、材木商や回漕業者として業績を挙げ、淀川周辺の治水土木事業、奥州や伊豆での鉱山開発が認められ晩年には旗本に取り立てられたという立志伝中の人物である。田中丘隅も八王子の絹行商人から身を起こし、後に荒川・多摩川などの治水事業で名をあげた。晩年には幕臣に取り立てられたという人物である。日本橋・茅場町近くに河村瑞賢屋敷跡の碑が今に残る。東作は瑞賢を目標に、事業家として成功し幕臣への出世を夢みていたのかもしれない。しかし結果は源内にも及ばない半端者となる。

松前・江戸湊・鉄砲洲

本所相生町の次は鉄砲洲で炭屋をはじめた。本所の時と同じように、源内との繋がりで秩父で焼いた炭を江戸で売ることをしたのであろう。炭屋を開いた鉄砲洲は海沿いで、一帯は江戸湊に近いところである。佃島や霊岸島も近かった。海路上方や遠く蝦夷地へも繋がるところであった。辺りには薪問屋、炭問屋が多かったという。

この界隈には蝦夷地との交易を稼業とする有力な問屋があった。紀州出身の栖原屋は材木薪炭問屋の他蝦夷地松前で物産交易商を営む。日本橋の出版業須原屋の本家筋にあたる。須原屋は東作・源内・南畝達の本を出している。東作の長男は家を継ぐまでここで奉公しているが、東作のコネだろう。

飛騨屋は下呂の出、下北半島から松前に渡り手広く材木請負を商う。松前藩の場所経営の請負で巨額の財をなした。蝦夷地の豊富な天然資源の煎り海鼠、昆布、鰊粕などは松前俵物として長崎から清国向けに輸出されていたしかし蝦夷地でオロシャとの抜荷(密貿易)に関わっているとの噂が絶えなかったらしい。新宮屋も材木商にして蝦夷地交易商で、飛騨屋と蝦夷檜の伐採権をめぐり争ったこともあった店だ。堺屋は幕府の廻船御用達苫屋の手先。後に幕府による天明の蝦夷地探検の際に、造船や出帆の手配・案内などを引受けたことで知られる。

蝦夷地を所領としていた松前藩は米が取れず、各地をいくつかの場所に分けアイヌ先住民との交易権を藩士の俸禄とする商場知行制度によっていた。この制度は次第に本州の交易商人に交易を請負わせ一定の運上金を納付させる場所請負制に方式に変わっていった。

松前藩の江戸屋敷は浅草近辺にあったが、江戸湊は霊岸島に蔵屋敷的な江戸会所があったともいう。そこには藩士のみならず藩御用達の商人達も出入りしたであろう。

東作には商売柄なのか松前藩や蝦夷地に繋がる人脈ができていく。一人は江差の代官にして交易商の村上弥惣兵衛、交際が密で莫逆の友だという。彼との縁か、もう一人は前の松前藩勘定奉行の湊源左衛門であった。飛騨屋と新宮屋の利権争いに絡んで藩を追放され江戸に滞在中であった。彼らから松前藩の抜荷問題とか赤蝦夷・ロシアの南下接近など蝦夷地情報が耳に入ってきた。鉄砲洲の側の築地には中津藩中屋敷があったが、そこにいた蘭医桂川甫筑は狂号竹杖為軽と名乗った源内の弟子でありここにも出入りしたようだ。甫筑のもとには、後に東作の蝦夷地行に同行する長崎通詞格・荒井庄十郎が寄宿していたようだ。

江戸鉄砲洲の地に住んだことで、松前藩に縁が生まれ遥か北方の蝦夷地へ

と東作はやがて誘われて行くことになるのだが、安永八年(一七七九)五十四歳にして頭を剃り法体となる。嘉穂庵東作と名乗った。別に宗教的な意味はあまりなく一種のファッション、隠居しての気分転換の為ではなかろうか？

その頃の事を、掛詞を駆使して彼は歌に残している……。

〈黒髪をおろし大根のりのみち　ほとけのそはやちかつきならん〉

おろしは髪と大根に、のりは海苔と法、そはは蕎麦と側と巧みだ。

その後の生き方を示唆するように、こんな歌も詠んでいる。

〈糸きれて閑になりたるてこの坊　此のたのしみも天から天から〉

てこの坊はデクの坊のこと、自虐してのことだろう。

蝦夷地渡海

時は老中田沼意次の時代であった。従来の米本位制の経済が揺らぎ、災害の多発から幕府や諸藩は財政再建が急務となっていた。田沼はたんなる倹約や節制策から商人的な発想による経済政策に乗り出していた。貨幣の改鋳、鉱山開発、印旛沼の干拓による新田開発などである。さらに北方のロシアからの交易要求も目立つようになっていた。こうした時代の流れの中で、田沼が着目したのが仙台藩の医師蘭学者・工藤平助の意見書『赤蝦夷風説考』(天明元年脱稿)であった。田沼は配下の勘定奉行・松本秀持、その組頭・土山宗次郎に調査と政策の検討を指示した。

工藤平助は蝦夷地情報を、先の湊源三郎など松前藩の関係者や蘭学修行をした長崎方面から耳にしていた。ロシアの蝦夷地への接近の脅威を指摘し、松前藩による抜荷の横行を防ぎロシア交易と蝦夷地の開発とを説く意見であった。

これを受けて松本・土山のラインは蝦夷地の実態調査、金銀銅山の開発、さらには新田開発、それに従事する労働力としての非人移住政策などを大胆に構想した。実際に天明五年(一七八五)に調査団が派遣され蝦夷地本島からカラフト、クナシリ、エトロフまで探検し、翌年報告書が出されている。この調査団の一員には、あの最上徳内も従者として参加し、彼の探検家としての第一歩となっている。

この田沼政権による大規模開発構想は、資金・技術・労働力各面に具体性に欠けるところがあり中止とされ、政権の崩壊で挫折してしまう。しかしこの発想はこれ以降も幕府の政策として、或いは明治新政府へとその底流として生き続けたともいえる。

この蝦夷地開発事業に、野心も少しあり山師的なことも好きな東作も些かの関わりがあったのである。煙草屋の本業は息子に任せ頭を丸め隠居しても、いわゆる閑人でおさまっているような東作ではなかった。平賀源内がはずみから犯した殺人で獄中で病死し、妻を亡くしてからは狂歌師仲間や幕府役人達、松前藩関係者との交遊に益々のめり込むようになっていた。

東作は、田沼政権のキーマンの一人勘定組頭・土山宗次郎に繋がりがあった。土山は狂歌の号を軽少納言と名乗った狂歌仲間で懇意の仲であった。

大田南畝の『三春行楽記』によれば、天明二年の春に、土山と南畝達狂歌師が盛に遊興を重ねた様子が描かれているらしい。羽振りのいい高級官僚が文人達を取り巻きにして遊里へ引き連れて飲み歩いたのであろう。その一行の中に、先輩狂歌師でご隠居の嘉穂庵・平秩東作もいたのである。

土山は、蝦夷地の抜荷の実態を知る蝦夷地の利権争いに会い江戸で謹慎中

の前勘定奉行の湊源三郎と懇意になっていた。公式の蝦夷地調査に先立つ私的な調査を考えていたと思われる。また東作は新たなビジネスチャンスの臭いを嗅ぎつけたようだ。土山は東作に蝦夷地への調査行を示唆し、湊源三郎から入手した松前図と資金も渡した。

蝦夷地での逗留先として、かねて昵懇の松前藩の檜山番所下役村上弥惣兵衛を頼ることにした。

蝦夷地行きの前年、天明二年(一七八二)四月、何故か木曽路を経て尾張・京・大阪・伊勢・遠江・駿河・伊豆と旅しているが目的は一体何だったのか？

父祖の地への墓参なら、まだ十七の時近所の人達と伊勢参りの経験があり、二度目のこととなる。それにしてでもだ。商売を通じての縁者への挨拶か暇乞いか？　どうも蝦夷地へ行くための目くらましと北辺事情調査のための予備調査ではなかったか？ この旅から江戸へ戻った翌年八月に、家族の止めるのを振り切って歌枕の地・松島詣でを口実に蝦夷地へと旅立った。

時に五十八歳になっていた。

どうも密偵のような動き方であるが、本人は「公儀へ冥加のため蝦夷にいたり実情相糺し、公儀のお為になるようはかりなは、莫大の御奉公たるへし」と、土山様から言われたからだという。つぎの歌を旅立ちの時詠んだが、あ

まり面白くない。

〈　紙子着て　あふくま川にはまるとも　亭主のすきは　いかか仙台　〉

同行者は、津軽弘前の商人八右衛門、長崎通詞格の荒井庄十郎、下人伊助の合わせて四人。旅の途中では、折からの東北地方は大飢饉の最中で、南部津軽に餓死する者数万人という惨状に出会っている。蝦夷地の松前に渡り、さらに江差に向かい村上弥惣兵衛邸に約半年越冬滞在する。滞在中は村上邸を根拠地に各地に出歩き、彼の地の実状調査に努めた。江差から越後経由で翌年五月江戸に戻り彼の地の地理・人情・産業・風俗などを調査報告を兼ねた紀行文として纏め『東遊記』と題し、公儀へ差し出した。さすがに商人にして物書きだけあって観察が行き届いているというが、ただアイヌの暮らしぶりや和人との関係などについてはほとんど伝聞の範囲であり、実態を深く知ったものではなかった。

天明というこの時代何故か蝦夷地へ渡り紀行文を著した人物が目立つ。幕府の巡検使だった古河古松軒の『東遊雑記』（天明八年刊）、謎の本草学者にして民俗学者菅江真澄も天明から寛政期にかけて蝦夷地に渡り『えぞのてぶり』等を書き残している。それぞれに特色があるが、この時代北辺に大いに

関心の目が向けられていた証拠だろう。

いづれにしろ東作の報告書は、土山・松本による田沼への「蝦夷地申聞意見書」提出に間に合った。天明五年(一七八四)のことであった。村上弥惣兵衛は当地の実力者であり、東作との間では蝦夷地大開発計画が進んだ時には奥尻島の利権を……というバブリーな約束があったとか。しかし村上は同年八月病死し、田沼政権も崩壊し、見果てぬ夢となる。

時代の終焉

蝦夷地から戻ってからは普通の生活に戻り、漢学の教養を活かして湯島・本郷辺りに住み、時には論語の講釈をしたりしたという。大流行となった狂歌壇の先輩として幾つかの狂歌本に作品が残っている。天明六年(一七八六)には還暦の祝宴を家族で祝っている。

田沼政権による蝦夷地開発プロジェクトであるが、公式の調査隊の派遣に続き、幕府自らによる実見的な御試交易の実施と進んだ。しかし将軍家治の逝去を切っ掛けに幕府内の反田沼勢力により蝦夷地一件差止めとなり、田沼以下は失脚してしまう。

土山宗次郎は派手で遊び好き、脇が甘いところがあった。田沼意次失脚後に公金横領が発覚することになる。その追求を逃れ逐電するが逮捕され翌年斬首されている。東作もこの逃亡事件を幇助したかどにより連座し「…不埒に付、急度叱置候」の処分となっている。

田沼失脚は狂歌ブームに水をさした。土山と遊んだ南畝も筆を折り狂歌壇を去ることになった。

東作にも自省の言があるが、天明八年(一七八八)の秋から病の床につくようになり、翌寛政元年(一七八九)三月に逝去。享年六十四歳であった。病床で「猶談笑シテ終ヲトル」という大往生だったらしいが、辞世の狂歌を求められ放屁して狂詠す、とあるが、本当かな。

〈南無阿弥陀仏ブッと出たる法名ハ　是や最後のヘヅツ東作　〉

大田南畝は東作の遺稿を世に出しているが、「筆ヲ下セバ則チ千言立チドコロニ就ク」と、評価している。確かに江戸町人による文筆活動の草分けで、狂歌師・戯作者としてほぼ一流だった。しかし事業家としては平賀源内のような破天荒なスケールも無く、土山宗次郎達との交流にみる政治的な動きも山師といわれる程のことは無い。中途半端がいかにも目立つのだ。まして河

村瑞賢のような業績を残した訳でも無い。

蝦夷地で江戸町民としてはじめて越冬したというが、探険家としてならば最上徳内、間宮林蔵のような足跡も残していない。民俗学的な紀行文としては菅江真澄に及ばず、まして後年の松浦武四郎のようにアイヌ民族の置かれた苦境と悪どい和人達の所業への鋭い観察があった訳でも無い。

酒好きで大根おろしと蕎麦が好き、本の挿画に描かれた姿では老眼鏡をかけ、懐に子猫を入れている。大した野心家では無く晩年は性格的には穏やかな好人物だったのかも知れない。残された家族は長男八右衛門の他、次男八十郎、長女鳰、次女銀の四人である。

弟子がいたのかどうか？　二代目平秩東作という名が資料にあったが、この人は通称鈴木光村。飛鳥山の麓に住んだ王子権現の神官とある。文政八年(一八二五)に六十八歳で没したとあるから初代より三十歳程の歳下となる。生前に交流があったのかどうか分からないが、初代の没後に遺族の了解を得て名乗ったと思われる。東作を慕ってのことと思えば、他人事ながら何だかうれしい。

ともあれ、松平定信による寛政の改革の嵐を前にした静かなサヨナラ大往生の人生だった。(了)

参考資料：

『平秩東作の戯作的歳月』井上隆明著 角川書店 一九九三年刊
『日本庶民生活史料集成第四巻』（「東遊記」収録）高倉新一郎編 三一書房一九六九年刊
『森銑三著作集 第一巻・第七巻』中央公論社 一九七一年刊
『日本随筆大成第二十四巻 「莘野茗談」』平秩東作著 吉川弘文館 一九七五年刊
『井上ひさし短編小説集成第九巻「平秩東作」』岩波書店 二〇一五年刊
『江戸生活事典』三田村鳶魚原著・稲垣史生編 青蛙社 二〇〇七年刊
『江戸町人の生活空間』戸沢幸夫著 塙書房 二〇一三年刊
『煙草おもしろ意外史』日本嗜好品アカデミー編 文芸春秋社 二〇〇二年刊
「たばこと塩の博物館」常設展示ガイドブック 二〇一五年刊
『日本古典文学体系五七「川柳・狂歌」』岩波書店 一九五八年刊
『江戸狂歌』なだいなだ著 岩波書店 一九八六年刊
『狂歌人名辞書』狩野快庵編 臨川書店一九八三年刊
『蜀山人・大田南畝と江戸のまち』新宿歴史博物館 平成二十三年度特別展図録
『大田南畝』沓掛良彦著ミネルヴァ書房 二〇〇七年刊
『大田南畝』浜田義一郎著 吉川弘文館 一九八六年刊
『蜀山人の研究』玉林晴朗著 東京堂出版 一九九六年刊
『天明の密偵 小説・菅江真澄』中津文彦著 文藝春秋社二〇〇四年刊
『開国前夜 田沼時代の輝き』鈴木由紀子著 新潮社 二〇一〇年刊
『天明蝦夷探険始末記』照井壮助著 影書房 二〇〇一年刊
『千島列島をめぐる日本とロシア』秋月俊幸著 北大出版会 二〇一四年刊
『日本近世の歴史 第四巻 田沼時代』藤田覚 著 吉川弘文館 二〇一二年刊
『翔べよ源内』小中陽太郎著 平原社 二〇一二年刊
『平賀源内』船戸安之著 成美堂出版 一九七八年刊
『江戸の想像力』田中優子著 筑摩書房 一九八六年刊
『内藤新宿の歴史』Webサイトより 他多数